

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第30回 日本とウガンダの架け橋となっているウガンダ人ーババ大使の巻

この2月、私は日本に一時帰国しました。この機会を利用し久しぶりに懐かしの札幌を訪れました。私は北海道の赤平という炭鉱町で生まれ、札幌は中学2年の時に父の仕事の関係で引越しし、大学を卒業するまで暮らした街なのです。このように北海道生まれの北海道育ちですので、親戚も高校・大学時代の友人も札幌市内・周辺地域に多く住んでおります。今回の札幌訪問も家族や友人との再会が目的でしたが、旧知の山岸育美さんとも12年ぶりに再会し旧交を温めることができました。その当時シンガーソングライターであった山岸育美さんは、ひょっとした縁でウガンダの子供たちを支援するNGO活動を2002年に始めました（因みに今も歌を歌うことは続けているとのことですが、本業はご主人と一緒に札幌市内でのレストラン経営です。）。彼女のその活動を精力的に応援したのが当時駐日ウガンダ大使であったジェームズ・ババ氏です。私が初めて山岸さんにお目に掛かりましたのは2006年でした。在ウガンダ日本大使館に赴任した私はババ大使（その当時は既に国会議員として活躍していました。）から、札幌在住の山岸さんがウガンダの子供たちを支援しているという話を紹介してもらい、同年末の休暇帰国時に滞在した札幌で彼女とお会いしたという訳です。



（ババ大使と山岸育美さん）

ババ大使は、駐日大使の本来の任務として5年間ウガンダと日本の関係強化のためにご尽力されました。2005年に帰任して国会議員に当選しましたが(呼称はババ大使と統一させていただきます)、それ以後も議員活動だけではなく様々な形で日本とウガンダの関係強化に関わってこられました。私は、このような職務を超えたババ大使のウガンダと日本の貢献こそ日本政府として公の形で顕彰するべきだと考え、ババ大使を2017年秋の叙勲者として日本政府に推薦したのです。本当に嬉しいことに私の推薦に基づいて同年11月、ババ大使は栄えある旭日重光章を受章されました。そして、ババ大使の現在の国会議員としての地位に鑑み、翌2018年6月にウガンダの国会議事堂内でカダガ国会議長臨席の下授章式を挙行し、私自身がババ大使に勲章を授ける栄誉を担いました。今回は、「日本とウガンダの架け橋となって頑張っているウガンダ人」パート3として旭日重光章ご受章のババ大使を紹介します。



(カダガ国会議長出席の下でのババ大使叙勲式)

ジェームズ・ババ氏は、1945年生まれの73歳です。出身は、ウガンダでも最北西部に位置し、コンゴ(民)及び南スーダンと国境を接する西ナイルに属するコボコ県です。1972年にマケレレ大学歴史学部を、卒業後ウガンダ外務省に入省し、職業外交官として本省及び在外公館で様々な役職を経験した後、駐国連次席大使、次いで外務本省の事務方ではナンバー2の一人となる地域協力総局長(対アフリカ関係の総括)という大事なポストを務められました。ベテラン外交官のババ氏の日本との縁は、2001年に駐日ウガンダ大使に任命されたことに始まります。

ババ大使は、精力的に日本とウガンダとの関係・交流を発展させるため持ち前の生真面目さを発揮され精力的な活動を日本国内・ウガンダ国内で展開されました。東京の大使館で単に執務をとるだけでなく、地方にも足繁く出張され、きめ細かく草の根レベルでの両国間の交流に尽力されたのです。そのひとつが、札幌を拠点にしてウガンダの子供たちを支援しようとしていた前述の山岸さんの活動のバックアップです。一方ウガンダからは、名産のコーヒーを日本市場に広めるためにも力を入れられ、中京地区のコーヒーチェーンを顧客にすることに成功しました。将にウガンダコーヒー売込みの営業部長のような働きですね。また、あしなが育英会がエイズ孤児支援のためにアフリカに活動範囲を拡大するに際してウガンダをその拠点としたことは以前このカンパラ通信で紹介しました。このようにしてカンパラ近郊の地に日本のNGOとして「あしながウガンダ」が発足するに当たっては、ババ大使が種々の便宜を図られたと聞いております。そして、2003年にはあしながウガンダがエイズ孤児の精神的ケアを行うための施設であるレインボーハウスが完成しましたが、その竣工式にムセベニ大統領が出席するという栄えある式典になりましたのもババ大使の強い働きかけのおかげです。また日本でウガンダ特産焼酎ワラジ（Waragi）の売り込みにもトライしましたが、これはうまく行かなかったようです。そして、2005年に任務を終え帰任されました。

ババ大使は、ウガンダに帰任して、地元のコボコ県のためを思い政治家に転身しました。与党国民抵抗運動（NRM）の予備選挙を勝ち抜き与党候補となって2006年の議会選挙に臨み、見事当選されたのです。外交官から政治家への転身、これで日本との縁が切れるのではなく、むしろ強化されました。国会議員に当選すると同時にババ氏はムセベニ大統領から副大統領府付国務大臣に任命されました。2004年にJICAが高収量でかつ病気や雑草に強いネリカ米に着目し「コメ振興プログラム」という技術協力をウガンダで開始したところ、ウガンダ政府、特にブケニヤ副大統領（当時）はこの支援を大歓迎し積極的に推進しようとしていました。一方、ババ大使も日本滞在中にネリカ米のことはよく勉強されていたおかげで、ブケニヤ副大統領を補佐し、ネリカ米の有用性を国内各方面に広め、ウガンダ国内全土での作付け面積増大といった形でその普及に寄与し、JICAの技術協力プログラムの成功に大きく貢献されました。2011年には内務担当国務大臣に配置替えとなりましたが、職責上国内治安を担当し、警察や入国管理を管轄した関係上、滞在許可の取得で困難を抱えたり、治安上不安に思っているウガンダに暮らす在留邦人のために最大限の便宜を図ってくれました。また、ウガンダ帰国後もあしなが育英会に対する協力は継続しております。あしながウガンダの節目となる主要行事にはほとんど出席され、その重要性をウガンダ国内にアピールしてくれています。2012年に秋篠宮同妃両殿下がウガンダを訪問されました。その機会にあしながウガンダとそのエイズ孤児のための施設を両殿下が訪問された時には、その深い縁に鑑み、ババ大使がウガンダ側を代表する形で両殿下を出迎え、見送りされました。ババ大使のあしなが育英会との関係では、「ア

フリカ遺児高等教育支援100年構想」にも触れなければなりません。この構想は、サブサハラ・アフリカの49ヶ国の各国から毎年一人ずつ優秀な遺児を世界の一流の大学に留学させ、母国の様々な分野で活躍するリーダーを育てようという玉井会長発案の壮大な構想で、2014年に本格的に開始されました。このようにして高等教育を受けた若きリーダー達が母国に帰ってより民主的な国づくりに参加し、経済や教育、医療の水準の底上げに貢献して、アフリカの国々の未来を明るくすること期待されています。この「アフリカ遺児高等教育支援100年構想」の実現のため、国際的な影響力を持つ人々をアドバイザーとして募り、「賢人達人会」と名付けられた諮問機関があります。ババ大使は、2016年からこの賢人達人会のメンバーとなられ、賢人達人会の総会に出席するためたびたび日本を訪問し、東京にあるあしなが奨学生の寮である心塾で講演を行うなど知的貢献や啓発活動に携わっておられます。



(玉井あしなが育英会会長とババ大使)

私も、ウガンダでの2回の勤務を通じてババ大使とは通算5年以上も親しくさせていただいています。今もカンパラにおいては定期的に意見交換を実施し、天皇誕生日祝賀レセプションへのご招待はもちろんのこと、日本祭り等の日本文化行事にも積極的に出席していただいています。私もババ大使の地元遠くコボコ県まで足を延ばし、ババ大使が同県の住民の生活向上のために自ら先頭に立って力を入れている各種野菜栽培の振興を目の当たりにしたこともあります。こうしたババ大使の長年にわたる日・ウガンダ関係の友好親善及び交流の増進という功績に対する謝意を冒頭に述べさせていただきましたとおりババ大使への叙勲という形で表すことができたことを心より喜んでおります。

最後に、ネリカ米との関係で一つご紹介致します。「ミスター・ネリカ」こと坪井専門家が2017年2月にネリカ米の研修指導するためにカンパラを訪れてくれました（坪井専門家についてはカンパラ通信の第5回をご参照ください。）。私は、この機会を捉えて、坪井専門家とババ大使のひさしぶりの再会を大使公邸でアレンジしました。坪井専門家は、これまでのババ大使のネリカ米普及に対する顕彰をするために通常は獲得が大変難しい「ネリカ1級」の検定書を贈呈しました。



（ネリカ1級証書を受け取るババ大使）



（ババ大使夫妻他と坪井専門家と一緒に）

今回はババ大使を「日本とウガンダの架け橋となっているウガンダ人」パート3として紹介しましたが、僭越ながら私も坪井専門家から架け橋として頑張っておられるババ大使と同じ「ネリカ1級」検定書をいただき感激致しました。これを励みとし、またババ大使が日本で東京のみならず全国各地へ足を延ばされたように、私もカンパラの大使館で執務するだけでなくウガンダ国内各地へ赴きネリカ米の普及をはじめとして様々な分野での日本とウガンダとの関係強化に以前にも増して尽力してまいりたい覚悟です。

（以上）